仲間つくって検診へ

温泉宿泊券抽選で当たる

がん検診の受診率向上のため、県は「仲間をつくってがん検診キャンペーン」を実施している。期間中にがん検診を受けた2人一組で応募すると、抽選ですてきな賞品が当たる。応募期間は来年2月3日まで。

県内在住、在勤、在学の40歳以上（子宮頸がん検診は20歳以上）で、4月1日～来年1月末にがん検診を受診した人が対象。市町村のがん検診のほか、勤務先の健康診断でも応募できる。同キャンペーンウェブサイト＝QRコード＝の応募フォームに必要事項を記入し、申し込む。賞品は脳ドック招待券2組4人、県内温泉旅館宿泊券2組4人など。

問い合わせは県健康長寿社会づくり推進課（☎027・226・2614）へ。

【メモ】対面、オンライン、電話で有料カウンセリングを実施している。詳しくはナラティブハート＝QRコード＝へ。

あすから がん征圧月間

働く世代のがん

がんは1981年以降、日本人の死因1位とされ、生涯でがんと診断される人は2人に1人と言われている。罹患した人の3人に1人は働く世代（20～60代）とも言われており、治療と仕事の両立が大きな課題となっている。医療の進歩もあって、短期の入院や通院での治療も可能になり、仕事を続けながら治療を望む声も高まっている。9月は「がん征圧月間」。がん治療と仕事の両立を支援する関係機関や県内企業の取り組みについて紹介する。

働く人の健康や安全、快適に働ける職場づくりを支援する群馬県産業保健総合支援センター（前橋市）は、厚労働省からの委託を受けて産業と仕事の両立支援に力を入れている。同センターが依頼した社会保険労務士や保健師などの専門スタッフが、無料で患者（労働者）や企業からの相談を受けている。

「2割が退職・廃業」

厚労省ホームページによると、がん患者の3人に1人は20～60代の働く世代で、罹患した人の2割が退職している。そのうちの19・8%の人が、がんと診断を受けて退職・廃業している。その中で、初回治療が始まるまでに退職した人は5・8%と半数を超える。

がんと診断されても、すぐには受け入れられない人は多く、治療に関することだけでなく、仕事や家庭についてなどで、安心感や持ちでいっぱいになるなどして「職場に迷惑をかけるから、仕事を辞めなくては」という考えが浮かぶことがある。同センター・産業保健専門職の八幡明香さんは「混乱している状態で、一人で退職という決断はしないでほしい。まずは相談して」と呼びかける。

同センター内のほか、県立がんセンター各4県内の病院に出張相談窓口を設置し、患者に限らず、病院の医療ソーシャルワーカーや企業からの相談を受け付けている。

「企業や病院と調整」

患者からの相談は「職場に戻れるのか」「治療と仕事の両立はどう報告すればよいか」「治療に復職したいがどうしたらよいか」といった悩みが多い。「体調が戻らず休職期間を延長したいが、解雇されないかが不安」と言った内容も。患者本人や企業からの相談があれば、必要に応じて病院と連携し、話し合いの場を設けて、治療しながら働き続ける支援を行っている（個別調整支援）。

企業からは「仕事は続けてもらいたいが、どの程度配慮したらよいかがわからない」と、「不安の声があがっている。制度を整えることに加え、従業員へ理解を広めるためのセミナーなども、同センターから講師を派遣して開催している。がん治療と仕事の両立を実現するために「お互いさまの精神」を企業や従業員の間に浸透させるなど、活動を重ねる。

同センター・労働衛生専門職の小林美香さんは「患者以外の従業員も、会社側が制度を整えてくれていると知ることで、安心して働ける。仕事に対するモチベーションアップにもつながり、企業側にもメリットはあるはず」と力を込める。

治療と仕事の両立支援

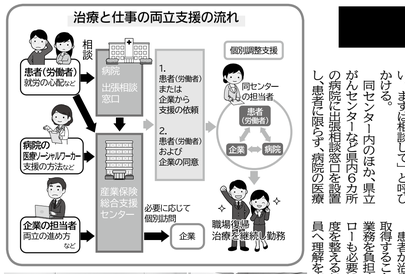
退職決める前に相談

暇の半日休・時間休の活用、または短時間勤務や在宅ワークなどの働き方について提案している。

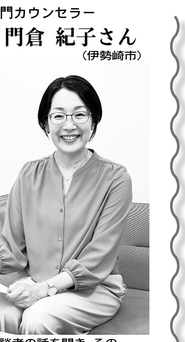
「お互いさまの精神」

患者が治療のために休暇を取得することは、そのメンバーの業務を負担する同僚へのフォローも必要だとされる。制度を整えることに加え、従業員へ理解を広めるためのセミナーなども、同センターから講師を派遣して開催している。がん治療と仕事の両立を実現するために「お互いさまの精神」を企業や従業員の間に浸透させるなど、活動を重ねる。

同センター・労働衛生専門職の小林美香さんは「患者以外の従業員も、会社側が制度を整えてくれていると知ることで、安心して働ける。仕事に対するモチベーションアップにもつながり、企業側にもメリットはあるはず」と力を込める。



同センター内で患者から相談を受ける八幡さん（左）と小林さん


「相談者の話を聞き、その人の望む方向に伴走したい」と話す門倉さん

がん専門カウンセラー
門倉 紀子さん（伊勢崎市）

「がんを告知されて生きる希望を失った」「主治医とうまく話せない」誰にも打ち明けられない―。がん患者が抱えるさまざまな不安や悩みに寄り添いたいと、30年にわたり看護師を務めた門倉紀子さん（53＝伊勢崎市＝は来年12月、「がん専門カウンセラー」として活動を始める。活動を始めた背景や、働く世代の患者が直面する問題などについて、門倉さんに聞いた。

―どのような相談内容が多いか。

聞きたいことがあっても、もじもじして質問できないなど、主治医とのコミュニケーションに悩む患者が何人かいるのが気になった。中には、患者が多くて一人一人聞くことができないと、そこで、相談者には「こう話してみてください」とシミュレーションしながら伝えている。医療と患者の橋渡しをしたいなと思う。

他には、がんと告知されてどうしていいか分からない、治療が始まるかしないか決められない、副作用をどう乗り越えたらいいか―などが多い。その人の思いを聞いても、その人の望む方向に一緒に考えるようにしている。

―働く世代特有の相談はあるか。

私の相談窓口を30～60代の多くは、孤独を感じている。高齢になれば、周りにがんを経験した人も多く比較的相談しやすいが、その年代はがんで落ち着くまで話を聞いたり、主治医の説明をかみ砕いて伝えてあげたりと、診療報酬に加算され職場の理解も得られた、資格取得後、延べ3千人以上の相談を受け、病院にとらわれずにいろいろな方向にケアする「がん化学療法看護認定看護師」の資格を取った。この資格があると、患者の受持ちが自分の無力さ、そばにいることができない悔しさがあった。

2016年に、抗がん剤治療を受ける人を専門にケアする「がん化学療法看護認定看護師」の資格を取った。この資格があると、患者の受持ちが落ち着くまで話を聞いたり、主治医の説明をかみ砕いて伝えてあげたりと、診療報酬に加算され職場の理解も得られた。資格取得後、延べ3千人以上の相談を受け、病院にとらわれずにいろいろな方向